

## 高橋五山賞・堀尾青史賞・右手悟浄、和子賞 受賞理由、経緯

### 第55回五山賞奨励賞

最終選考に残った10作品の中で、総合得点8.14（10点満点）で最高位となった。ママと3人の子どもたちとペットの犬と猫がそろってお昼寝。日中の眠気を誘うけだるさを明るい黄色を基調としたパステル調の色彩で表現し、デフォルメしたユーモラスなキャラクターの造形と、それぞれのいびきをキャラクターごとにさまざまに形象化したところがこれまでにないユニークさを持つと高い評価を得た。奨励賞にとどまったのは、楽しいいびきのオノマトペの合唱に見ている側も眠気に引き込まれそうになったころ、ペットの犬の寝言で全員があわてて目を覚ます場面の寝言に「朝だ！」という人語が使われた点に、いびきのオノマトペで高まった新しい表現への期待感を逸らされた思いを審査委員が感じたことによる。このコンビがもたらした子どもの身近な生活に取材したテーマ展開と楽しい絵画表現は、ともすればルーティーン化しがちな紙芝居表現に新しい試みを持ち込んだと言える。次作に期待したい。

### 第55回高橋五山賞奨励賞

「おひるねですよ」

内田麟太郎・作 市居みか・画（童心社）

#### ◆内田麟太郎（児童文学作家）

1941年福岡県大牟田市生まれ。父は詩人内田博（本名・弘喜智）。大牟田市立中友小学校、松原中学校、福岡県立大牟田北高等学校卒業。19歳にて上京。看板職人をしながら詩を書き始める。詩人遠地輝武、秋山清に私淑。38歳より児童書を書き始める。絵本『さかさまライオン』（絵本にっぽん賞）、絵本『うそつきのつき』（小学館児童出版文化賞）、絵本『がたごとがたごと』（日本絵本賞）、絵本『すやすやタヌキがねていたら』（日本絵本賞）、絵本『かあちゃんかいじゅう』（けんぶち絵本の里大賞）、絵本『ともだちできたよ』（日本絵本賞）。絵本『くじらさんの一た一めならえんやこーら』（日本絵本賞）を受賞。童話『ふしぎの森のヤーヤー』（産経児童出版文化賞）推薦。絵本「おばけでんしゃ」スウェーデン版が翻訳絵本の部「ピーターパン賞」銀賞受賞。少年詩集に『うみがわらっている』銀の鈴社、『きんぎょのきんぎょ』理論社、「ぼくたちはなく」PHP研究所（第15回三越左千夫少年詩賞）、「しっぽとおっぽ」岩崎書店がある。『おれたちともだち』シリーズはロングセラーになっている。第55回児童文化功労賞受賞。第39回巖谷小波文芸賞受賞。日本児童文学者協会理事長。

◆市居みか（イラストレーター）

1968年、兵庫県生まれ。神戸大学教育学部美術科卒業。大手電器メーカーにて企画、デザインに携わった後、イラストレーター、画家として活動をしながら、個展・グループ展を重ねる。2001年『ヘリオさんとふしぎななべ』（アリス館）で絵本作家デビュー。作品には『イモムシかいぎ』（小学館）、『ろうそくいっぱい』（小峰書店）、『ねこのピカリとまどのほし』（あかね書房）、『いっぱいみちをあるいていたら』（ひかりのくに）など。神戸にある「ギャラリーVie 絵話塾」で絵本コースの講師も勤める。

第2回堀尾賞

◆石山幸弘（茨城大学教育学部・群馬県立女子大学非常勤講師）

・『紙芝居文化史-資料で読み解く紙芝居の歴史』（萌文書林；初版2008年1月）を刊行し、紙芝居研究の信頼できる基礎データを構築した。

・群馬県立土屋文明記念文学館主席専門員時代に、「紙芝居がやって来た」（第19回特別展「紙芝居展」2002.7）を開催した際、紙芝居のパフォーマンスそのものが最も重要な「展示物」と捉え、社会状況を背景に様々に果たされてきた紙芝居の役割を、具体的な作品を見せながら展示。また、展示品の解説には、子どもたちにもわかる平明で、科学的で、読み物風という斬新な方法を取入れた「紙芝居展」の企画内容が、関係者に高く評価された。

第2回堀尾賞

◆Tara McGowan 氏（タラ・マックガワン USA）

（Cotsen Children's Library/Metadata Consultant for Japanese Collections）

・現在は米国のプリンストン大学のコッツェン児童図書館）に在籍し、ロイド・コッツェン氏が寄贈した膨大な所蔵品の中で、江戸後期頃の絵本や古文書、紙芝居、おもちゃ絵、玩具などを担当し、国内外の研究者向けに、所蔵品の説明解説を英文で書く学芸員的な仕事をしている。

・20年前、日本の紙芝居に出会い、自身でも手作り紙芝居作品を制作している。また、日本語学校で紙芝居の実演を行う他、米国の小学校で手づくり紙芝居の作成から実演実習まで行うプログラムを実践している。これらの活動は、国際的に注目を集めている日本固有の文化だった紙芝居を体系的に捉え、世界に発信する先駆的な仕事を行っている」と評価された。

### 第3回右手悟浄・和子賞

#### ◆千竈八重子（鬼ヶ島文庫「紙芝居道場」主宰・大分）

・図書館を退職後、大分県湯布院塚原高原に立つ鬼ヶ島文庫という私設図書館で「紙芝居道場」を主宰し15年余り。800冊以上の児童文庫、絵本や紙芝居を所蔵し、子どもたちのために開放している。また月2〜3回、紙芝居実演研究会を開き、湯布院を拠点に大分県紙芝居サークルの元締め役を担っている。紙芝居文化の会大分県代表

・3年前にもらい火による火災で文庫が焼失したが、時を置かず、多くの紙芝居の仲間の協力を得、紙芝居道場を再建した。その年に、九州の紙芝居に関わる人々に呼びかけ、堀尾青史生誕100年企画「堀尾青史作品展と宮澤和樹講演会」2015年5月を九州で開催し好評を博した。その不屈なパワーは敬意を集めている。

### 第3回右手悟浄・和子賞

#### ◆人と本を紡ぐ会（大阪府箕面市非営利公益市民活動団体）

・2000年5月に発足し、市民の中からの運動として、「図書館をもっと楽しむために」をコンセプトに図書館と主体的に関わり活動をしていく箕面市非営利公益活動団体。紙芝居に関しては、演じる講座、街かど紙芝居、紙芝居上演会、手づくり紙芝居講座、箕面の民話紙芝居制作・発行などを継続的に行っている。

・「箕面紙芝居まつり」は第25回を迎え、毎年延べ1500人の参加があり、毎年テーマを掲げて、7月の一週間、メイプル小ホール・中央学習センターで「紙芝居コンクール」二次審査、最終審査。展示&実演を開催している。

・市民と箕面中央図書館による継続的な活動が大きな流れを生んだ。「市民と行政が協働」の運動を高く評価する。